



# 営農情報

## 「あまおう」7月の管理

第97号 令和2年7月3日

南筑後・久留米普及指導センター  
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

### 現在の状況と気象の経過

#### 【生育概況】

4月以降、平年と比べ降雨が少なかったことで、一部でランナーの発生が遅れたほ場が見られました。また、暖冬の影響で親株の窒素が切れたほ場が多く、子苗の活着不良や葉先の枯れ、葉の萎れが散見されました。病害虫については、ハダニ類やカキノヒメヨコバエの発生が見られますが、昨年多発したチビクロバネキノコバエの発生は少ない状況です。

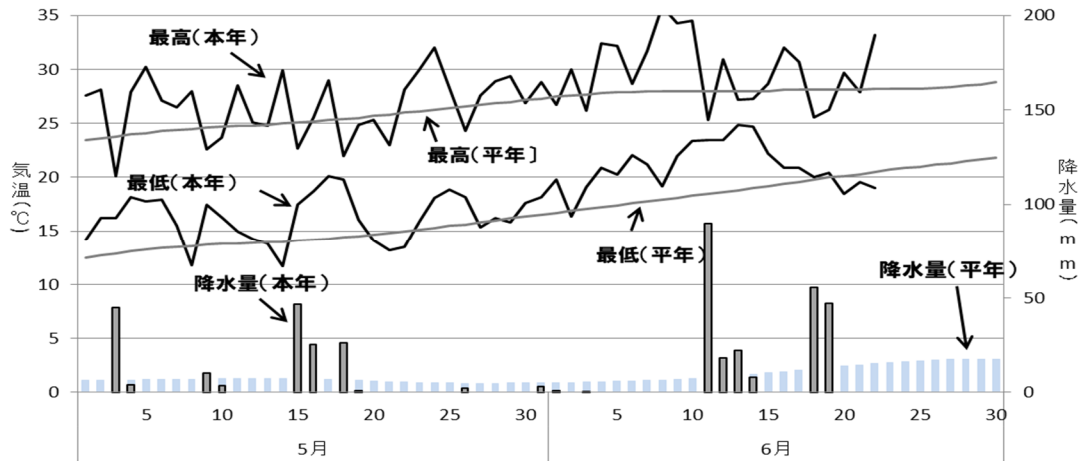


図1 気温及び降水量の推移 (アメダス久留米)

### 気象予報と管理のポイント

福岡管区気象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。降水量は平年より多く、気温は高い予報です。

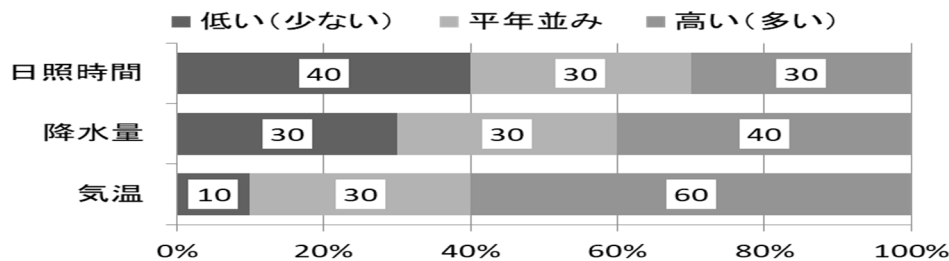


図2 1か月予報 (予報期間: 6月27日~7月26日) 発表日6月25日

#### 【今月の管理のポイント】

- ① 炭そ病、疫病の発生を拡大させない。
- ② 軟弱徒長や根傷みの防止
- ③ 肥料の流亡による窒素不足や効かせすぎに注意

## 育苗管理

### 【かん水】

- 梅雨時期は特に根傷み（湿害）に注意し、培土の乾き具合を観察して時間やかん水量を調節する。
- 少量多回数のかん水を心掛ける（晴天日は一日3～4回程度）。

### 【施肥】

- 活着後、置き肥を施用する。置き肥は溶出に時間がかかるため、液肥を1～2回施用する。  
（例：OK-F-1を1,000～1,500倍）
- 2回目の置き肥以降、最終追肥時期（IV型8月10日、V型8月15日、普通ポット9月初旬）まで液肥のかん注や葉面散布によって窒素を切らさないようにする。特に、普通作型は2回目の置き肥から最終追肥時期の期間が長いため、窒素切れを起こしやすいので注意する。
- 降雨によって窒素が培土から溶脱するため、大雨の後には窒素切れに注意する。

### 【葉かぎ】

- 葉かぎは、活着後根が十分にまわってから開始する。
- 1回当たりの摘葉数は2枚以内とし、葉数は最初は徒長防止のため2.5～3枚に、それ以降は3～3.5枚を確保する。（ポット間隔が狭い場合は3枚程度とする。）
- 葉かぎ直後は、「炭そ病」の予防散布を必ず行う（傷口からの感染防止）。

表1 最終葉かぎ時期の目安と葉数

| 作型    | 最終葉かぎ時期と葉かぎ後の葉数 |
|-------|-----------------|
| 株冷    | 入庫10日前に3～3.5枚   |
| 夜冷    | 処理開始5日前に3.5枚    |
| 普通ポット | 8月30日頃に3～3.5枚   |

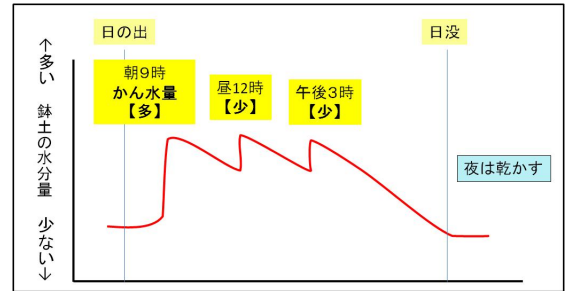
### 【浸水・冠水対策】

梅雨末期は局地的な集中豪雨が発生しやすく、特に、満潮と重なると有明海沿岸地帯は、浸水・冠水する恐れがあります。大雨が予想される場合は、事前に育苗床の排水対策（溝の設置や排水ポンプの準備など）をしておきましょう。

## 病害虫防除

- 薬剤散布は早朝、もしくは夕方散布を基本とする（日中の高温時は薬害発生のリスクが高まる）。
- 病害は予防防除、害虫は初発での防除を心掛ける。
- 農薬の使用回数は、親株から切り離してからカウントが始まる。

図3 かん水パターン事例（晴天日）



### 【施用例】

6月下旬（置き肥①）

花むすめ（IB化成S1号）で  
1～2粒／鉢

置き肥①施用後：OK-F-1

1,000倍～1,500倍 1～2回

7月中旬（置き肥②）

夜冷・株冷Ⅲ型  
花むすめ 1粒／鉢

上記以外の作型

花むすめ 1～2粒／鉢

置き肥②施用後

⇒最終追肥時期まで窒素を切らさない

## 【疫病】

- 梅雨時期、7～8月の高温多雨期に発生が多い。

## 【萎黄病】

- 罹病した場合は有効な薬剤がないため、無病株から採苗し、無病を植え付ける。
- 本田は薬剤による土壤消毒を行う。また、ポットなどの資材も消毒する。

## 【炭そ病】

- 疑いのある株や生育異常株は周辺も含めてほ場の外へ持ち出す。
- 葉かぎやまとまった降雨の後には必ず防除を行う。

写真1



ナミハダニ

## 【ハダニ類】

- 葉かぎ後に、薬液が葉裏に十分付着するように散布を行う。  
※本田でチリカブリダニ・ミヤコカブリダニを使用予定の場合は、天敵に影響の長い農薬の使用を避ける。



写真2



写真3

カキノヒメヨコバイ

## 【カキノヒメヨコバイ】

- 上位1～2枚目の展開葉を加害し、葉脈間の退緑斑や葉の湾曲を起こす。
- 発生を確認したら薬剤による防除を行う。

## 【コガネムシ類幼虫】

- 発生が予想される場合は、ダイアジノンS Lゾル 500倍のポットかん注を行っておく。

表2 <コガネムシ類幼虫に適用される農薬>

| 薬剤名         | 希釈倍率 | 使用方法     | 使用時期   | 本剤の使用回数 |
|-------------|------|----------|--------|---------|
| ダイアジノンS Lゾル | 500倍 | 育苗ポットかん注 | ポット育苗時 | 1回      |

## 本田準備

ハウス土壤は、雨に十分あてるとともに有機物を十分施用し、8月中旬には定植床の準備が終わるように、計画的な作業を心がけてください。

表3 本田の土づくり

| 作業                                      | 目的  |
|---|---|
| ● 有機物の施用<br>麦わら：6月まで<br>完熟堆肥：8月(床作り前)まで | ：前年度の栽培により消耗した土壤有機物の補給<br>・これから有機物を投入する場合は、完熟堆肥などの十分に腐熟の進んだ有機物を施用する。(施用量の目安 麦わら：30a分/10a、完熟堆肥：2t/10a)   |
| ● 雨にあてる<br>(6月～7月上旬)                    | ：土壤中の未熟有機物の分解と不要な養分や病害虫の排出<br>・土壤中の微生物が、大量の雨水で活性化する。  |
| ● 土壤消毒<br>(7月中旬～8月上旬)                   | ：土壤病害虫(ネグサレセンチュウ、萎黄病)の予防と雑草防除<br>・ガス消毒、太陽熱消毒のいずれかを実施する。<br>(土壤病害虫の実害が発生している場合は、ガス消毒を行う)<br>・ガス消毒は、クロロピクリン錠剤・クロピクフロー等がある。<br>・ガス消毒は事故がないよう、使用量・使用時期・使用方法に注意する。 |

# 特集「エコロングを用いた育苗期の一発施肥体系」

「夏場の労働時間短縮」と「気象条件に左右されない肥培管理」に向けて、エコロングを用いた育苗期施肥試験を実施しました。生育及び花芽分化に問題はなく、エコロングの特性として雨の影響を受けにくいというメリットもあり、試験を実施した生産者からは大変良い評価を得ています。詳細を聞きたい方は、J A、もしくは、普及指導センターまでご相談ください。

## (1) 試験結果 (9月15日定植 株冷作型)

試験区：エコロングトータル391-40 2g/ポット

対照区：花娘 2個 + キッポ青500倍 2回

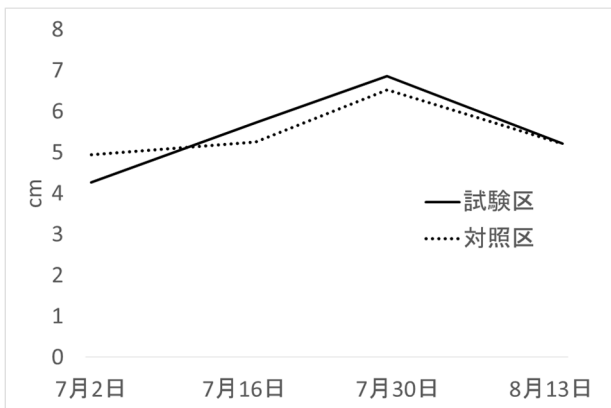


図4. 心葉柄長

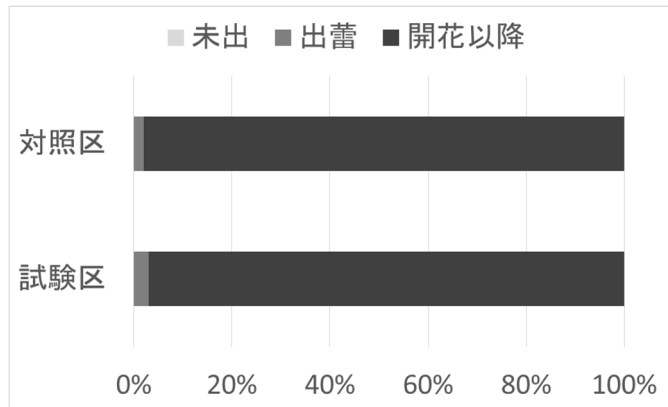


図5. 出蕾率 (令和元年10月25日調査)

→心葉柄長及び出蕾率は花娘とほぼ変わらなかった。従来の肥培管理では、2~3回程度の置肥が必要であったが、エコロングであれば1回でよく、夏場の省力化になる。ショット君を使用することで正確かつ省力的にエコロングを施用できた。

## (2) 施用事例

表4 施用事例

| 作型 | エコロングの種類                 | 施用日          | 施肥量 | 最終追肥の目安 (液肥かん注) |
|----|--------------------------|--------------|-----|-----------------|
| Ⅲ型 | エコロングトータル391-40 (40日タイプ) | 6月<br>20~25日 | 2g  | 8月5日            |
| Ⅳ型 |                          |              |     | 8月10日           |
| Ⅴ型 |                          |              |     | 8月15日           |
| 普通 | エコロングトータル391-70 (70日タイプ) |              |     | 9月初旬            |

※エコロングは初期の肥効が高く、施用直後の葉色が濃くなるがありますが、エコロングの特性ですので心配ありません。

※エコロングは、溶出日数を経過すると急激に体内窒素濃度が低下するので注意しましょう。

**農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!**